

## 一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

### 1. まえがき

最近の世の中の動きや世相をみるにつけて、哲学者ピーター・F・ドラッカーのいうポストモダン（超近代化合理主義）の世界は、情報技術分野の著じるしい進歩に、それをとりまく人間力、いわゆる中心となる「心」がついてゆかず、人間社会での共存共栄の基本となる相手の存在、立場を思い考える深慮遠謀の心が無くなってきた無縁の社会となってきた気がする。

そこで、自己中心の物の見方、考え方から相手のことを考える「利他行」の基本となる仏教思想を学び実践するために一般大衆に愛され、親しまれた羅漢さん、尊者さんの異名の「阿羅漢」とは、「大乘仏教と小乗仏教」、そして「他思故有我」いわゆる相手を思い考える故に己れの存在があるという考え方について学んでみたいと愚考する。

「他思故有我」の考え方が失われた人間社会は、1) 絆のない社会、2) 縁のない社会、3) 助けてといえない社会の到来なのである。

メディアは、基地反対だとか、政策が悪むいとか苦情はとりあげるが、だからどうするとはいわない。

基地は反対、しかし自分達の安全は考えてほしい、全くエゴ中心の社会となってしまった。

アメリカの軍事力による抑止力として考える場合、相手の気持、立場を考える配慮が必要である。

基地の問題は、我れ我れ日本国民の一人一人の問題であり、政権政党だけの問題ではない。

そういう意味において、苦情や文句をいい、すべてを当事者まかせにせず積極的に「有縁社会」を考え実践すべきであり、我れ関せずの「無縁社会」でなく、お互いに苦しみを分かち会いたいものである。

ここに、先人の歩んできた道を学び考え、英知を生かすことが必要であり重要さが存在する。

世の中の変化を知り、変化を生かす物の見方、考え方が必要であり、その基本的な考え方として仏教の教えが、小乗仏教から大乘仏教へと変遷してきた事実、自利行いわゆる自己中心的な考え方から利他行への変化、その要因は何なのか等を学び考え、現在の企業活動の有り方等に生かすべきだと愚考する。

「阿羅漢」とは何か、何が受け入れられたのか、「大乘仏教」と「小乗仏教」との違い、「他思故有我」という物の見方、考え方が何故必要なのかを考えてみることにしたい。

それは、結果として現在の自己中心的な物の見方、考え方が「無縁社会」へとつながっている要因であることを知ることになると愚考する。

### 2. 阿羅漢を知る

仏教の世界で羅漢さんと呼ばれる仏像に出会うことがあるが、阿羅漢尊者の略称である。

一般に漢訳では、尊敬、供養を受けるに値するという意味で応供と訳されている。

仏教の修行の最高段階、またはその段階に達した人として敬われる地位であり、「無学者（煩惱を断ちつくして、もはや学ぶ必要のない境地に達した人）」をさす言葉が羅漢さんの愛称である。

仏縁があって、愚生の最も尊敬する仏教哲学者、中村 元先生の故郷、島根県で講演する機会があった。

その折、雪舟（室町後期の画僧 1420～1506）さんが作庭されたという雪舟庭園のある臨済宗東福寺派、医光禅寺を再び訪づれた。禅寺の本尊は一般的には釈迦如来であるが当医光禅寺の本尊は薬師如来、脇侍が日光、月光菩薩であることからもとの天台宗寺院、崇観寺の流れを思わせる。

ただ、医光禅寺といわれることにふさわしい十六羅漢像があったことである。

もともと十六羅漢とは、玄奘（唐の法相宗、俱舎宗の開祖 600～664 一説に 602～664）が訳した「法住記」、詳しくは「大阿羅漢難提密多羅所説法住記」に登場する永らくこの世に存在して正法（正しい釈迦の教え）を護持するという十六人の阿羅漢のことで我が国では平安時代以降、特に禅宗で受容されていた。

仏教の修行において、すでに得た功德を失うことなく退歩しない不退転の地位にまで達した人のことである。その「十六羅漢」とは  
 1) 賓度羅跋囉惰閻、2) 迦諾迦伐蹉、3) 迦諾迦跋釐墮閻、4) 蘇頻陀、5) 諾矩羅、6) 跋陀羅、7) 迦理迦、

著者：広島大学生物生産学部講師  
元近畿大学産業理工学部客員教授  
日本禅画家協会名誉理事  
中国少林書画院名誉教授  
法号位 法印 禅画位 奥伝  
青木伸雄  
釋 禳 禪（野風生）  
雅号 樹泉